

貴重書の保存・修理

Conservation and restoration of rare books

石 弘 光

ISHI Hiromitsu

図書館の本館と新館に挟まれた一隅に社会科学古典資料センターがある。ここには本学の誇る世界に冠たる貴重な文献が所蔵されている。アダム・スミスの『諸国民の富』（1776年）やカール・マルクスの『資本論』（1867年）の初版本はもとよりのこと、その蔵書コレクションは世界的な名声を博している。その中でもとりわけ「メンガー文庫」は、現在ではハーバード大学の「クレス文庫」、コロンビア大学の「セリグマン文庫」、ロンドン大学の「ゴールドスミス文庫」と並んで、社会科学の世界4大文庫のひとつに数えられているものである。本センターは1978年に附属図書館から分離し、独立した。現在その蔵書数は約7万冊、主として1850年以前に出版された貴重書を所蔵し、その数も毎年増加している。

古い書物は長い年月を経るに従い劣化が進み、放置しておくともボロボロになり、本の体裁を保持しえないことになる。古い資料の中には13世紀あたりまで遡及できるものもあるから、当時の紙の質や製本のやり方から想起できるように、良い状態に保存することはたいへんに難しい仕事になる。単に保存するだけでなく、劣化の進んだもの、破損したものは修理をせねばならない。これが古文献そして貴重書の保存・修理といわれる作業になる。この作業のために本センターには1995年から「保存修復工房」が設けられ、外注だけでなく館内で実際に修理が施され保存が図られている。

具体的には、まず問題のありそうな古い貴重書の劣化状況の調査から始められる。そしてその書物をクリーニングし、酸性進行紙がある場合、それを除去し中性紙との取り替えを行う。また製本に際してステープラが使用されている場合、それを除去し再製本せねばならない。あるいは革製本の場合は、時間の経過とともに損傷も激しいだけに修復も一層たいへんになる。製本が困難なものは保存箱に収納され書架に戻されることになる。その他、塵や通気性にまで配慮し、保存環境整備を図らねばならないことはいうまでもない。

昨年の7月、附属図書館長に就任し、自動的に本センター長を兼任することになった。それ以前には訪れる機会もなかった「工房」にも足を運び、その作業の一端を見せてもらい、改めてその重要性を認識したわけである。現在、本センター自体、少ないスタッフと乏しい予算という大きな難問題を抱えているが、とりわけ「工房」は厳しい状況にある。本センターの持つこの「工房」は日本の大学で唯一の施設といわれるが、常勤のスタッフはなく週2～3日来るパート職員（4～5人）の協力を依拠している。本来、本学の所蔵する「世界の文化遺産」たる貴重書の保存・修理の意義を考えると、外部からの応援を頼まず、専任の技官が配置されてしかるべきであろう。

と同時に、この保存・修理に充当される予算も決して満足のいくものではない。「メンガー文庫」の保存・修理のために如水会から年750万円（1994年から4年間）の寄付をいただき、やっと息をついている次第である。貴重書の保存・修理という地味で根気のいる仕事に、物心ともにもっと陽が当たってほしいと思う。

（社会科学古典資料センター長・経済学部教授）